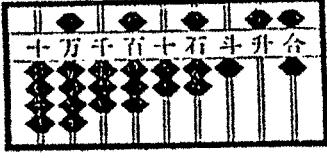
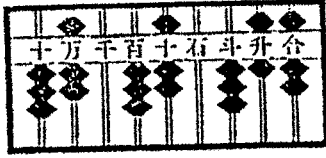


たし算・ひき算が珠算の学習に大切と考えられるようになった

塵劫記をはじめとしてこれまでの本は、最初が二の段のわり算とそのかけ戻し、次は三の段のわり算とそのかけ戻しという問題から入って、たし算やひき算の説明はありませんでした。

文化5年(1808)に松岡能一の「算学稽古大全」の本の中に初めて「たし算、ひき算が算学の基礎になる」と述べて、加減算の説明をそろばんの図で示しています。この頃からその他の珠算書にも、加減算の説明を記載した本が出始めました。

四 遍 之 図	三 遍 之 図
	
<p>九合加へるには地にて一を去り上の桁へ一升加へる 八升加へるには地にて三を加へ天の五を去り上の桁へ一斗加へる 七斗加へるには地の三を去て上の桁へ一石加へる 六石加へる 五十加へるには天の五を去て上の桁へ百石加へる 四百加へるには天地にて六を去り上の桁へ千石加へる 三千加へるには天の五を加へ地にて二を引く 二万加へるには天地にて八を去り上の桁へ十万加へる 十万加へるには天の五を加へ地の四を引く はじめ</p>	<p>九合加へるには地にて一を去て上の桁へ一升加へ天の五を去る 八升加へるには地にて三を加へ天の五を去て上の桁へ一斗加へる 七斗加へるには地の三を去て上の桁へ一石加へる 六石加へる 五十加へるには天の五を去て上の桁へ百石加へる 四百加へるには天の五を加へ地にて一引 三千加へる 二万加へる九万と成る 十万加へる四十万と成る はじめ</p>

算学稽古大全

程度の高い内容の「算法新書」が刊行された

天保元年(1830)長谷川寛 閱、千葉雄七 編で、珠算の初歩から日用数学、天元術(方程式の解き方)、点竄術(日本式の代数)まで和算全般について系統的に書かれた幕末の代表的な数学書である「算法新書」が刊行されました。